海外だより

アメリカ・コーネル大学での研修に出席して

国立公衆衛生院主任研究官　一圓光弥

3年前，イギリスのマンチェスター大学にフォーサイス先生をお訪ねした時，幸にも同大学を退職されたばかりのチェスター先生とも親しくお話しをする機会を得た。それは全くの偶然によるものであったが，その偶然が縁で今度のアメリカ行も実現することになった。

コーネル大学の大学院（Graduate School of Business and Public Administration, Cornell University）は，毎年6月ごろに，保健医療関係の仕事に従事する管理職者を対象に，2週間程度の研修プログラム（Health Executives Development Progam）を設けているが，このプログラムのコーディネイターの1人として長年指導にあたってこられたのがチェスター先生であった。先生が私を紹介して下さったらしく，このプログラムのディレクターであるコーネル大学のブラウン教授から，以後毎年参加のおさそいをいただいていたのである。しかしアメリカの医療保障事情には不案内なこともあって，なかなか出席する気持にはなれなかった。

しかしその後，私自身が同じような教育活動を行う公衆衛生院に移ったこともあり，また今年は特にすぐれた講師陣を揃えることができたので是非来るようにとのブラウン教授のおさそいもあり，不勉強は重々承知の上で思い切って参加してみることにした。

コーネル大学はニューヨークより北西約300キロに位置する，静かな人口3万程度の大学町，イサカにある。アイビー・リーグの1つに数えられている名門で，実業家コーネルにより1865年に設立されたものであるという。キャンパスは南北に伸びるカユガ湖をのぞむなだらかな丘の上にあり，眼下に広がる美しい町なみは，背後の青い湖やこれを囲む広大な緑によくマッチしていた。私の想像力の乏しさによるのであろうが，生産活動の片鱗だにうかがわせることのないその光景は，私にはあまりにもきれいすぎて，非現実的に映った。

キャンパスの中にもいっぱいに水をたたえる湖があった。その先端は大きな滝になっており，その水流をカユガ湖にまでつなぐ渓谷がこれに続いていた。キャンパスはこの湖と渓谷によって南北に分かたれ，私達の宿舎はその北部に，教室はその南部に位置していた。宿舎は50年も前に建てられた中庭を囲む古い建物で，外壁はつたで覆われ，室内の机や本棚にも年月を経た落ち着きがあった。これに対し私達の教室のある建物は新しくモダンな施設であった。教壇を中心に弧を画く形で階段状に机がならぶ教室がいくつか続いていた。左右に滝や渓谷をながめながら，あるいはその落流を受けて回る水車や岩場にかかる虹を楽しみながら，10分以上もかかって宿舎と教室とを往復するのが私達の日課となった。

私は6月10日の朝，ワシントンをたってニューヨーク経由で昼すぎにイサカの空港に到着した。同じ便でやってきた数名の参加者とともに迎えの車で宿舎に行き，登録をすますと，数冊の本の他に積み重ねると15cmにもなる資料が与えられた。これを抱えるようにして部屋にもどり，目を通してみた。その大半は論文のコピーで，各講議内容ごとに分類されていた。講議に先だって関係する論文や資料を読んでおくようにとの細かい指示も含まれていた。先生によっては5～6編の論文の予習を要求しているものもあった。早速意気込んで「読破」にとりかかってはみたが，2，3の論文をしかも虫食的に拾い読みするのがやっとで，読破などとはもってのほかであることはすぐ判明した。以来予習についてはあまり真面目に考えないことにした。

ところでこれらの資料は第1週目に限ったもので，その週末にはまた同量の本と資料が与えられた。各講議の直前に追加された資料も少なくなく，後のこ

とになるがその重みで私のスーツケースの車輪は完全に押しつぶされることになった。

私達の最初の行事は5時半から始まったカクテル・アワーであった。夕食を前にしてアルコールを飲みながら小一時間歓談する訳であるが，こうした時間は，2週間の私達の生活の中で，あるいは正規の講議以上に重要な役割を果たしていたのかもしれない。その晩は講議がなかったので，夕食後に簡単な自己紹介とオリエンテーションをすませて解散した。私は久しぶりにお目に掛ったチェスター先生と，宿舎の中庭に椅子を並べて話し合った。質問に答える形で日本の医療保障のお話しをするうちに，時間をつくるからそんな話しを皆さんに報告するようにと勧められる羽目に陥ってしまった。外はカーディガンが必要なほどの涼しさで，空には星が大きく輝いていた。

総勢45名程度の参加者のうち約半数は病院の管理者であった。次に多かったのは地域の保健活動全般の計画や管理にたずさわるヘルス・システム・エージェンシーの担当者と，州政府の保健計画担当者であり，他は中央政府，大学，HMO，医師会，PSROなどから派遣された人々であった。病院関係者と地域や州の保健計画にたずさわる人々との間ではしばしば激しい議論が展開されたし，年齢構成も20歳代から60歳程度までと幅広くバラエティーに豊んだ集団であった。海外からも，私のほかにイギリスから，行政にもかかわっている病院の専門医と地方保健当局のアドミニストレーターの各1名が参加していた。このプログラムは今年で22回目になるが，日本からの参加者はこれがはじめてであるとのことであった。

プログラムへの参加料は2週間近くで1,400ドル（約30万円）というから決して安くはないが，海外を含む各地から集められたすぐれた講師陣や，ため息の出るような三度の御馳走に豊富な資料を思えば，納得がゆくものである。もっともほとんどの参加者は所属する機関の費用負担で参加しているようで，われわれ外国人参加者を含め若干の私費参加者を対象にフェローシップも用意されていた。

翌日からいよいよ講議が始まった。7時40分から8時半ごろまでが朝食で，これを終えると道中の景色を楽しみながら教室に向った。教室に入ると，まず自分の名札が与えられ，自分の机にこれを立てることになっていた。こうして講師の先生からは各自の名前と所属とが一目でわかることになり，お互いにファーストネームで呼び合いながら議論が進められる段取が整うわけである。

朝の講議は9時から12時までであるが，途中で15分ほどのコーヒー・ブレークがある。コーヒー，紅茶，ジュース，果物，クッキーなどが用意され，すぐに帰られる先生などと個人的に話し合える貴重な機会にもなっていた。

朝の講議が終るとまた宿舎にもどり昼食をととる。午後の講議は1時半から始まるので食事を終えるとすぐまた教室までの行進が始まる。午後の講議は，コーヒー・ブレークをはさんだ最初の3時間の部分と，3時45分から4時45分までの1時間の部分とに分かれていた。5時45分からはまたカクテルが始まり，夕食を終えると7時半から夜の講議が9時半まで続き，その後に最後のスナックがあって解散という日程である。

こうして一日が終ってみるともうすっかりヘトヘトで，とても明日の用意をする余裕はなくなっていた。講議の形式も，先生がおだやかに自分の考えを述べるのを聞いておればよいといった形はむしろ少なく，問題を提起しつつ参加者をあおりながら進める形が多く，そうした経験のない私などは毒気にあてられたかのようにいつまでも興奮がさめやらなかった。

こんな毎日が金曜まで続いた。ほとほとアメリカ人のエネルギッシュな生活ぶりに感心させられた。講義の先生もエネルギッシュに迫ってきたが，参加者の方もそれぞれよく勉強しよく遊んでいた。翌日の資料を全部読んで寝たという男もいた。朝だいたい4時ごろまでかかったというから私などには到底真似のできないことであるが，本人はケロッとしている。家でも3時ごろまで起きているから平気だと語っていた。若い連中は若い連中で，毎晩飲んで踊って楽しんでいたようである。私も少し余裕がでてきたのであろう，金曜の夜には連中と遊びに行くことにした。少し早めに帰らせてもらったが，それでも床につい

たのはもう4時近かった。毎朝6時からテニスをするグループ，ジョッギングをする者もいた。

幸にして土曜日と日曜日の講義は午前中だけである。土曜の午後は車で30分ほどの州立公園に行き，美しい滝つぼで泳ぐことができた。日曜の午後は全員でカユガ湖に面したブラウン教授の別荘に行き，ピクニックを楽しんだ。こうして週末に一息入れたあと，月曜からはまた厳しい日程が続いた。

われわれの最後の行事は木曜の夜の会食（バンケット）であった。古い大きな納屋を改装した施設での最後の集いである。もちろんこの施設も大学キャンパスにある。ここで一人一人に三人のコーディネーターの先生から修了証書が授与された。皆飲んで食べて歌って踊って最後の晩を楽しんだ。解放感を思う存分味わっているかのようであった。

ある種の「ショック」を与えながら聞き手の心をつかんで放さない講議，ぼんやりする余裕を与えないで次から次へとつめ込む日程，なるほどこうした教育方法もあるのかと感心させられたものであった。すでにある程度の経験を持つ専門家を対象とする今回のような研修には，適した方法であるかもしれない。

最後に参加者による講師の評定についてお話ししておこう。参加者には，各講師についてその講議内容（content）と講議の進め方（presentation）についてそれぞれ5段階の評価を下すことが求められる。また自由にコメントを記入することもできるようになっている。気を抜いた構議をしたりするとその結果がてきめんに現われる仕組である。皆の評価が低いからといって必らずしもすぐに講師採用をやめることになる訳ではないが，次回以降のプログラム作成に大変参考になるとのことであった。